

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

会期	平成30年10月13日（土）～平成30年12月24日（月）
休館日	毎週水曜日（祝日の場合は翌日休館）
開館時間	4月～11月：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで） 12月～3月：午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
入館料	[個人] 大人 600円 小・中学生 300円 [団体]（20名以上） 大人 540円 小・中学生 250円
企画展関連イベント	【ギャラリートーク】 日時：平成30年10月13日（土） 午前の部 午前10時～ 午後の部 午後 2時～ 講師：藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館担当課長） 【講演会・ナイトツアー】 日時：平成30年11月10日（土） 16：00～ 講師：講師：藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館担当課長）
主な展示所蔵品	■市島家所蔵ガラス湿板 ■市島家所蔵ガラス乾板 ■市島家所蔵紙焼写真 ■市島家所蔵絵葉書 ※展示品については展示出陳リストを参照ください。

主 催/ 新発田市 協 力/ 早稲田大学図書館
お問い合わせ/新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

皆さんは今日何枚写真を撮りましたか？

スマートフォンの普及は、かつてないほどに写真を身近なものとしたのではないのでしょうか。誰もが気軽にプロ級の技術を駆使して、日常のさまざまな“一瞬”を切り取り家族や友人と共有することが当たり前になっています。

19世紀前半のヨーロッパで生まれた写真が幕末の日本に伝わり、新発田の地に最初の写真館が開業したのは1872年（明治5）頃と言われています。その後、撮影機材の進歩にともなって、写真は明治時代を通じてちょっと贅沢な趣味として多くの人々に親しまれるようになりましたが、そんな新しい“遊び道具”を市島家の人びとが放っておくはずがありませんでした。8代当主・徳次郎（湖月）は写真をいやがる父静月の姿を残すべく、自ら技術を習得したそうです。また9代当主・徳厚の時代には市島家の人びとの日常が写真に記録され、今日の我々にその姿を伝えてくれています。

市島邸にはそうやって市島家で撮影された写真やそのガラス乾板、さらには写真に関する図書、絵葉書など、写真に関する資料が多数所蔵されています。今回はそんな市島邸に残る“写真”をテーマに、当時の人々の暮らしに触れていただければと思います。

一枚の写真は、写された人や風景だけでなく、撮影された時の気温や物音、人々の声までも鮮明に思い出させてくれることがあります。晴れの日姿だけでなく、当たり前の日常をさりげなく切り取った一枚が一生の宝物になることもあるでしょう。市島家の人々はどんな思いで撮影し、また被写体となったのか、そんな彼らに思いを馳せつつ、一枚の写真に秘められた物語を想像しながら、どうぞゆっくりご覧ください。

平成30年度第2回市島邸企画展示

「古写真がたえる明治の市島家～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～」

出陳資料目録

ガラス湿板

1	市島徳次郎（湖月）肖像	金井弥一（新潟南浜通）撮影？	アンプロタイプ 付：名刺「貴族院議員 市島徳次郎」
2	市島徳次郎（湖月）肖像	高木氏（？）撮影 1871（明治4）	アンプロタイプ
3	市島徳次郎（湖月）肖像		アンプロタイプ
4	市島徳次郎（湖月）肖像		ガラス湿板
5	李崑雲磨碑法帖元板	市島徳次郎（湖月）撮影 1881（明治14）	ガラス湿板
6	池大雅書	市島徳次郎（湖月）撮影？	ガラス湿板
7	市島静月肖像	市島徳次郎（湖月）撮影？	ガラス湿板
8	市島静月肖像	市島徳次郎（湖月）撮影？	ガラス湿板
9	市島サト肖像	市島徳次郎（湖月）撮影？	ガラス湿板

ガラス乾板

10	リュミエール社製ガラス乾板箱		
11	ガラス乾板（人物・風景写真）		

紙焼写真

12	市島徳次郎（湖月）肖像	1874年（明治7）撮影	鶏卵紙 裏面に「明治七年写 二十八歳」とあり
13	市島徳次郎（湖月）他集合写真		鶏卵紙
14	市島徳次郎（湖月）写真	丸木利陽（東京・新シ橋角）撮影 1897年（明治30）3月24日	
15	市島徳次郎（湖月）写真	堀真澄（京都）撮影	
16	市島徳次郎（湖月）写真	朝倉（新潟）撮影	
17	市島徳次郎（湖月）写真	金井弥一（新潟撮影）	
18	市島徳次郎（静月）写真	市島徳次郎（湖月）撮影？	
19	市島徳厚・隆子結婚写真	小川一真（東京）撮影 1915年（大正4）	
20	田園風景	吉原写真館（新発田）撮影	
21	庭園風景	丹呉寛一郎（新発田）撮影	
22	市島新鼻排水場	金井弥一（新潟市）撮影 1912年（明治45）	
23	初代万代橋	金井写真館（新潟市）撮影	
24	大隈重信・綾子肖像	森田写真館（新発田）撮影 1913年（大正2）9月14日	
25	大隈夫妻と市島家の人びと	1913年（大正2）9月14日	
26	東京専門学校寄宿舎生と大隈夫妻	山本誠陽（神田錦町）撮影 1899年（明治32）	
27	大隈重信夫妻と東京専門学校の学生たち	工藤孝（神田錦町）撮影 1900年（明治33）頃	

平成30年度第2回市島邸企画展示

「古写真が伝える明治の市島家～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～」

出陳資料目録

絵葉書さまざま

28	絵葉書帖	市島初之丞（徳厚）所用	
29	渡瀬淳子絵葉書	1929年（昭和4）5月20日	
30	明治天皇御大葬記念絵葉書帖	1912年（大正元）	写真絵葉書150枚貼込
31	復興	東京市 高速度写真ゼン、チ、ヤ商会（銀座） 1930年（昭和5）5月	紙焼写真28枚貼込
32	陸軍歩兵第十六連隊演習風景写真帖	欠年月24日～26日	紙焼写真14枚貼込
33	市島家写真アルバム	1924年（大正13）頃	

参考資料

写真必用 写客の心得	松崎晋二著 鶴淵初蔵、1886年（明治19）	
蘭説弁惑 磐水夜話	大槻玄沢述 山形屋東助、1799（寛政11）	
金銭出納類別簿	市島家 1900年（明治33）7月	
本店依托出納類別簿	市嶋家東京事務所 1916年（大正5）	

古写真が伝える明治の市島家

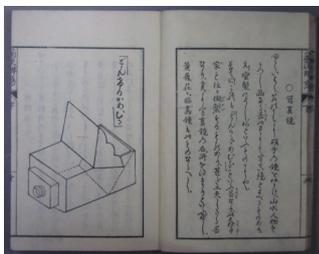
～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

カメラ・オブスクラ～写真の歴史～

写真の歴史を振り返ったとき「写真には単独の発明者はいない」という言い方ができる⁽¹⁾。一般的には1839年、フランスのダゲール (Daguerre, Louis Jacques Mandé, 1787-1851) が銀板写真術を公表したことが草創期のできごととして有名だが、実際にはそれ以前からさまざまな人々が独自の方法で“カメラ・オブスクラ”⁽²⁾に投影される像を定着させる手段の研究を続けていた。ダゲールは写真の実用化、商品化に最初に成功した人物ということになるのかもしれない。現在最古とされる写真は、1820年代にニエプス (Niépce, Joseph Nicéphore, 1765-1833) が撮影したものである。

ダゲールが開発したいわゆる“ダゲレオタイプ”と呼ばれる写真機が日本へもたらされたのは1848年(嘉永元)のことで、長崎に来航したオランダ船が持ち込んだものを、のちに長崎における写真撮影の先駆となった上野彦馬(1838-1904)の父である商人、上野俊之丞常足(1790-1851)が引き取り、それを薩摩藩が購入したのが最初と言われている。

西洋における写真技術はその後さらに進展し、画期的な撮影法である乾板写真法が導入された。取り扱いも容易であり露光時間も短い乾板は、それまでのように大掛かりな機材を持ち歩かなくてもすむ手軽さから、多くのアマチュア写真家が登場する原動力となったと言われており、市島邸にも80点ほどのガラス乾板が残されている。その後、ロールフィルムが普及し、さらに写真撮影は容易、かつ身近なものへとなくなっていった。



(1) 写真の歴史はじめ本展示の内容については、おもに以下を参照した。

- ①ポーモン・ニューホール著、小泉定弘・小斯波泰共訳『写真の夜明け』（クラシックカメラ選書7、1996年、朝日ソノラマ）
- ②クエンティン・バジャック著、遠藤ゆかり訳『写真の歴史』（「知」の再発見双書109、2003年、創元社）
- ③小沢健志『幕末・明治の写真』（ちくま学芸文庫、1997年、筑摩書房）
- ④小沢健志編『幕末 写真の時代』（ちくま学芸文庫、1996年、筑摩書房）
- ⑤斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』（歴史文化ライブラリー175、2004年、吉川弘文館）
- ⑥藤原秀之『早稲田大学図書館所蔵 明治期彩色写真帖』（「早稲田大学図書館紀要」52、2005年）
- ⑦東京都写真美術館『知られざる日本写真開拓史』（山川出版社、2017年）

(2) 暗室の一面に小穴をあけると、反対の面に外の景色が逆さに投影されるという、カメラ・オブスクラ (camera obscura=暗室) の理論は西洋では風景画の写生などに利用されていた。日本では織豊期にオランダ商館を通じてその理論が伝えられ、鎖国下の江戸後期には、少ない情報を元に蘭学者によって研究・紹介された。たとえば大槻玄沢はその著書『蘭説弁惑 磐水夜話』（1788年<寛政11>）で写真鏡＝どんけるかあむる（どんくるかあむる）、として図入りで解説している。蘭学者にとってこの理論は既知の事実であり、実際にそれを用いたと思われる人物像もある。

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

新発田と写真

新発田の写真関連の人物としてもっとも早い存在に木津幸吉（1830－1895）が挙げられる。当地に生まれた幸吉が北海道箱館（現在の函館）に渡り仕立屋を開業したのは1859年（安政6）のことであった。その後ロシアの初代駐日領事・ゴシケビッチ(Goskevich, Joseph Antonovich, 1814－1875)にその腕を見込まれたことが評判となり順調に業績を伸ばした幸吉は、仕立て業によって得た利益で写真機材を購入、ゴシケビッチから撮影術を学び、1864年（元治元）に箱館に北海道最初の写真館を開設したという。その後1869年（明治2）に上京して浅草で開業、東京でも指折りの写真師としてその名を馳せた。

一方、新発田で最初に写真館を開設した人物としては丹後寛一郎（1847－1917）の名が知られている。新発田藩士であった寛一郎は1872年（明治5）頃に横浜の下岡蓮杖（1823－1914）のもとで写真術を学び、帰郷後諏訪神社境内に写真館を開設した。ほかにも1870年（明治3）頃には写真撮影をはじめていたという吉川秀斎をはじめ、新発田での写真は明治の早い段階から広がりを見せていたようである。



古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

市島邸のガラス乾板



市島邸が所蔵するガラス乾板については早くからその存在は知られていたが、内容の精査をするまでには至っていなかった。近年、新発田市で写真館を経営する吉原悠博氏（吉原写真館館主）によって、現物一点一点についてポジ画像のデータ化がなされたことで、その内容を容易に見ることができるようになった。本展示もその成果を踏まえて考察を進めることができた。吉原氏にはあらためて御礼申し上げる次第である。

市島邸には80点以上のガラス乾板が所蔵されている。いずれもフランス・リヨンのリュミエール社（A. Lumiere & ses fils）製の乾板を使用しており、市島邸の人々をはじめとした人物を撮影したものと、新潟県内だけでなく全国各地の観光地を撮影した風景写真に大別した5つの箱に収められている。

撮影者としては、第一に市島宗家8代当主、市島徳次郎（湖月、1847－1917）が想定される。湖月の写真趣味は有名だったようで、「早くから写真術を研究して殆んど玄人」で、写真をいやがる父・静月に対して「私が撮影するのですから」と言って撮影を実現した（引用はいずれも「越後の豪農市島家」2 <『農業世界』13-2、1918年>による）という。ただ現存する資料で湖月が撮影したと思われるものはいずれも「湿版」であり、乾板使用の事例は見当たらない。他には大正時代の市島家の金銭出納帳にフィルム購入の記載があり、晩年まで多くの家族写真を残した9代当主、市島徳厚（1893－1959）も乾板使用者の候補としてよいだろうが、もう一人、自ら乾板写真の被写体にもなっている市島清松（1878－1905）の存在が挙げられる。湖月の次男、すなわち徳厚の兄にあたる清松は、東京専門学校に学び将来を嘱望されたが1905年（明治38）に26歳の若さで死去している。市島邸に残された1900年（明治33）頃の出納帳には「清松様御用写真紙代」の記載があり、清松も写真撮影をしていたことがわかる。今日市島家に残された写真の中には、あるいは清松撮影のものが含まれている可能性も否定できない。

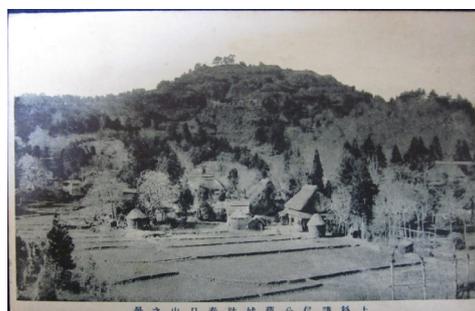
古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

市島家にのこる絵葉書

日本で郵便制度がはじまったのは1871年（明治4）、郵便葉書（官製葉書）が発売されたのはその2年後1873年（明治6）からである。当初、絵葉書といえば官製葉書に使用者自身が手描きしたものくらいであったが、1900年（明治33）に私製葉書、すなわち葉書大の紙に定額の切手を貼って使用することが認められるようになると、絵だけでなく写真を使った「絵葉書」が作成、販売されるようになった。今でも観光地で売られているような写真の絵葉書はもちろん、日清、日露戦争、また大地震や台風などの自然災害に取材した報道写真を使用したもの、戦勝記念、天皇の葬儀や即位を記念したものなど、19世紀後半から20世紀にかけて大量の絵葉書が作成されることとなった。なかには個人的に撮影した紙焼写真をそのまま葉書として使用したようなものも見られるようになった。

市島邸には、おもに徳厚宛の絵葉書や未使用の各地の名所絵葉書などが数冊のアルバムにまとめて保管されている。今回はそうした絵葉書のうち、徳厚はじめ市島家の人々に送られたもの、また未使用の絵葉書の中から当時の名所絵葉書などを紹介する。



古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

写真用語解説

ダゲレオタイプ(銀板写真)

1839年にフランスのダゲール (Daguerre, Louis Jacques Mandé, 1787-1851) が実用化し、商品化した写真撮影法。感光性を持たせた銀板に撮影し、その銀板自体が完成品(写真)となることから、焼き増しはできず、また左右が反転した像となる。撮影にかかる時間(露光時間)は初期のもので10～20分程度と言われている。

湿板写真

イギリスのアーチャー (Archer, Frederick Scott, 1813-1857) が1851年に発明したもので、透明なガラス板にコロジオン(ニトロセルロースをエタノールなどで溶かした液体)を塗って撮影する。コロジオンが乾くと感光性が落ちてしまうため、濡れているうちに撮影しなくてはならないが、露光時間が10秒程度と短く、撮影後のガラス原板(ネガ)から鶏卵紙などに焼き増しができるため、ダゲレオタイプに代わって初期の写真の中心となった。

アンブロタイプ

アメリカのアンブロス (James Ambrose Cutting, 1814-1867) が考案した湿板写真法の一つで、濃度の高い溶剤を使用することでコントラストがはっきりした画像を得ることができ、ガラス原板そのものが作品となり、黒い布の上に置いて鑑賞する。

乾板写真

1871年にイギリスのマドックス (Maddox, Richard Leach) が発表、1878年ころからは工場で大規模生産されるようになった。感光性の高い乳剤をゼラチンに溶いてガラスに塗布したもので、ガラス乾板と呼ばれる。湿板の10倍以上の感度を持つと言われ、乾いた状態でも使用できたことから、湿板に取って代わるまでには多くの時間を要しなかった。工場生産された乾板は箱入で頒布され、日本にも輸入された。

鶏卵紙

1850年にフランスのブランカール=エヴラール (Blanquart-Evrard, Louis Desiré, 1802-1872) が発明したもので、卵白に食塩等の塩化物の混合液を塗った紙を乾燥させ、さらに硝酸銀溶液によって感光性をもたせたもので、19世紀後半には写真用印画紙として盛んに用いられた。セピア色の鶏卵紙写真に彩色すると、鮮やかな擬似カラー写真となる。

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



1. 市島徳次郎（湖月）肖像

アンプロタイプ 付：名刺「貴族院議員 市島徳次郎」

金井弥一（新潟南浜通）撮影？

金井弥一（1865－1935）は14歳の時から東京の鈴木写真館で修行を重ね、1888年（明治21）、郷里新潟の新堀通に写真館を開業した。その後、1890年（明治23）に開催された第3回内国勸業博覧会で優等褒賞を獲得するなど写真家として業績を重ね、1897年（明治30）に南浜にあらたな写真館を開いている。一方市島徳次郎（湖月、1847－1917）が、名刺にある貴族院議員となったのは1890年（明治23）の第1回帝国議会に多額納税議員の一人として選出されたときからであり、40代半ば近くから50代にかけてということになる。この写真はそれより若いように見え、またアンプロタイプという撮影技法も明治前半までの肖像写真に多くみられるものであることから、金井の撮影だとすれば、彼が新潟に帰った直後ころに撮影されたものかもしれない。



2. 市島徳次郎（湖月）肖像

ガラス湿板

アンプロタイプ

高木氏撮影？ 1871年（明治4）



3. 市島徳次郎（湖月）肖像

アンプロタイプ



4. 市島徳次郎（湖月）肖像

ガラス湿板

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

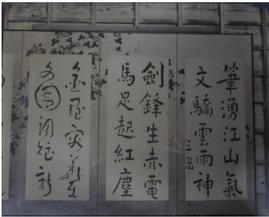


5. 本邕雲磨碑法帖元板

ガラス湿板

市島徳次郎（湖月）撮影 1881（明治14）

李邕（リ ヨウ、678－747）は中国唐代の書家で、字は泰和、また北海と称した。行書の名手として知られ、多くの碑文を残した。これはその一つ、「雲磨將軍李思訓碑」の法帖（碑文の拓本、あるいはそれを模刻したものを折本仕立とした書道の手本）を撮影したもの。



6. 池大雅書

ガラス湿板

市島徳次郎（湖月）撮影？

池大雅（1723－1776）は江戸時代中期の画家、書家で、勤・無名などと称し、大雅堂・三岳道者などと号した。池大雅が漢詩の一節をさまざまな書体で抜き書きしたものを屏風に仕立てたもの。ただ後に撮影された市島家の人々の写真（参考）の背景に写り込んでいるものとは配列が異なっており、貼り替えられたことがわかる。



7. 市島静月肖像



ガラス湿板

市島徳次郎（湖月）撮影？

写真を嫌がる静月を撮影するために、湖月が自ら写真術を学び、その上で「私が撮影するのですから」と説得したという話が伝わっており、本写真がその時のものではないかと推定し、撮影者を湖月とした。また別に展示した静月夫人サトの写真も同じ時に撮影されたものと推定した。

8. 市島静月肖像



ガラス湿板

市島徳次郎（湖月）撮影？

9. 市島サト肖像



ガラス湿板

市島徳次郎（湖月）撮影？

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



10. リュミエール社製ガラス乾板 (箱)

1871年、フランスのリヨンで写真館の経営をはじめたA.リュミエール (Lumiere, Antoine) は、その後写真乾板製造の工場経営に成功し、3,000人の従業員を擁する工場では年間1,500万点の乾板が製造されていたという。1894年以降、会社経営はアントワーズの2人の息子、オーギュスト (August) とルイ (Louis) に委ねられ、製品は日本へも輸出された。1880年代の末にアメリカのイーストマン・コダック社からセルロイド製のロールフィルムが発売されると、ガラス乾板の使用は減少していった。



11. ガラス乾板 (人物・風景写真)



12. 市島徳次郎 (湖月) 肖像

鶏卵紙 裏面に「明治七年写 二十八歳」とあり
1874年 (明治7) 撮影



13. 市島徳次郎 (湖月) 他集合写真

鶏卵紙



14. 市島徳次郎 (湖月) 写真

丸木利陽 (東京・新シ橋角) 撮影

1897年 (明治30) 3月24日

向かって右が湖月、左が宮城県の資産家で湖月と同じく貴族院議員となっていた飯淵七三郎 (1846-1926)、立っているのが小林小太郎、山梨県選出の貴族院議員である。この日は第10回帝国議会の最終日にあたり、多額納税議員として7年の任期を無事に終えた記念に撮影したものと思われる。丸木利陽 (1854-1923) は明治から大正期に活躍した東京の写真家。1913年 (大正2) に宮内省囑託、また1915年 (大正4) の東京美術学校写真家創設にも尽力した。

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



15. 市島徳次郎（湖月）写真

堀真澄（京都）撮影



16. 市島徳次郎（湖月）写真

朝倉（新潟）撮影



17. 市島徳次郎（湖月）写真

金井弥一（新潟）撮影



18. 市島徳次郎（静月）写真

市島徳次郎（湖月）撮影？

別に展示したガラス湿版から鶏卵紙に焼き付けたもの。



19. 市島徳厚・隆子結婚写真

小川一真（東京）撮影 1915年（大正4）

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



20. 田園風景

吉原写真館（新発田）撮影



21. 庭園風景

丹後寛一郎（新発田）撮影



22. 市嶋新鼻排水場

金井弥一（新潟市）撮影 [1912年（明治45）]

1911年（明治44）、福島潟を全面取得した市島家は、耕地保全のための排水機を新鼻地区に設置した。これはその時の様子を撮影したものと思われる。



23. 初代万代橋

金井写真館（新潟市）撮影

第四銀行頭取であった八木朋直の出資により万代橋が架けられたのは1886年（明治19）のことであった。当初は有料（橋賃1銭）だったため利用が伸びず、従来の渡し船による人々も多かったという。1900年（明治33）県が買収し無料となったが、新潟大火（1908年）により焼損、翌年2代目が完成、さらに交通量の増加などに対応するため、1929年（昭和4）に現在の3代目の万代橋へと架けかえられた。



24. 大隈重信・綾子肖像

森田写真館（新発田）撮影 1913年（大正2）9月14日

この月10日から23日まで、大隈夫妻は新潟、富山、石川、福井の各県を歴訪し、大学校友をはじめ各地の要人たちと交流を深めた。その案内をおこなったのは市島謙吉（春城）で、新発田来訪時に大隈夫妻は市島宗家（市島邸）に宿泊している。これはその折に市島邸で撮影されたもの。

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



25. 大隈夫妻と市島家の人びと

1913年（大正2）9月14日

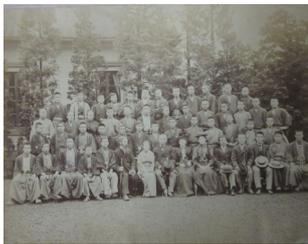
湖月閣前で撮影された市島家の人々と大隈夫妻。前列大隈の左がその妻綾子、その隣には当主・市島徳次郎（湖月）の妻ジュンが座り、大隈の右には先代当主夫人（湖月の母）であるサト、その隣が湖月の妹ハナ、その隣が湖月の娘ミネ。また後列は左から早大教授の浮田和民、市島謙吉（春城）、市島徳次郎（湖月）、右端がのちに当主となる市島初之丞（徳厚）である。



26. 東京専門学校寄宿舎生と大隈夫妻

山本誠陽（神田錦町）撮影 1899年（明治32）

東京大隈邸の庭園で撮影されたもの。前列中央の大隈夫妻の右には天野為之が、綾子夫人のとなり4人目に市島謙吉（春城）がおり、さらに最後列中央付近には、東京専門学校在学中であった市島清松の姿が見える。清松は市島宗家・徳次郎（湖月）の次男に生まれ、将来を担う人材として期待されていたが、26才の若さで世を去り市島宗家は弟である初之丞（徳厚）が嗣ぐこととなった。



27. 大隈重信夫妻と東京専門学校の学生たち

工藤孝（神田錦町）撮影 1900年（明治33）頃

中央の大隈夫妻を取り囲むように多くの学生たちが集まっている。その中には市島清松の姿も見える。



28. 絵葉書帖

市島初之丞（徳厚）所用

見返しに「明治四十一年作 市島用 This book belongs to H, Ichishima」とある。



29. 渡瀬淳子絵葉書

1929年（昭和4）5月20日

ソファのひじ掛けに凭れた女性の絵葉書にサインが記されており、裏面にはサインと同筆で日付と「市島様へ 淳子」とある。写真とサインの主は渡瀬淳子。女優で、島村抱月の芸術座では松井須磨子と同じ舞台にたち、夫である澤田正二郎らとともに新国劇を旗揚げし、澤田と離別後は新劇でも活躍した。撮影当時は銀座でバーを経営しており、おそらくは徳厚が客として店を訪れ、その席で「ブロマイド」風の絵葉書にサインをして渡したものと思われる。この絵葉書の翌年1月に淳子は急逝、新聞各紙がその死をとりあげるほどであった。1900年頃から盛んにつくられた私製絵葉書の使用方法としても興味深い。

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



30. 明治天皇御大葬記念絵葉書帖

写真絵葉書150枚貼込

1912年（大正元）

明治天皇大葬（1912年9月13日）の様子に加え、天皇ゆかりの人々、さらには幕末・維新期のさまざまなできごとに関する絵葉書をまとめたもの。折帖の両面に150枚が貼り込まれている。



31. 復興

紙焼写真28枚貼込

東京市

高速度写真ジー、チー、サン商会（銀座） 1930年5月

1923年（大正12）9月の関東大震災で大きな被害を受けた東京の町が、数年の間に復興してきた様子をまとめた写真帖。帝都復興事業の一環として東京市が編集したもの。ジー、チー、サン商会（G.T.Sun商会）は、写真家、山端祥玉がはじめたもので、有名写真誌『サン・ニュース』につながる会社である。



32. 陸軍歩兵第十六連隊演習風景写真帖

紙焼写真14枚貼込

欠年月24日～26日

年月は不明だが、新発田の地におかれた第16連隊の演習風景と思われる。



33. 市島家写真アルバム

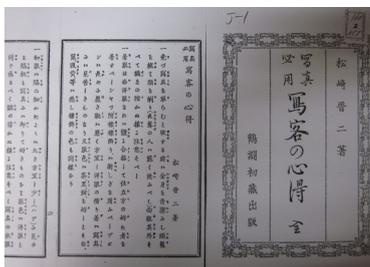
1924年（大正13）頃

市島家の日常を撮影した数々の写真の中には徳厚によるものも含まれていると思われるが、それぞれの具体的な撮影者は未詳である。

2018年度第2回 市島邸企画展示

古写真が伝える明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



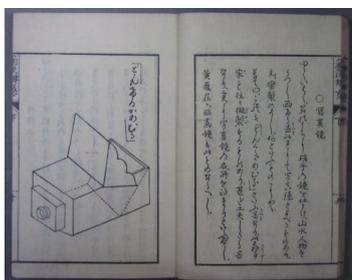
<参考資料>写真必用 写客の心得

松崎晋二著

鶴淵初蔵、1886年（明治19）

東京の写真家、松崎晋二が著した写真を撮られる側の心得。撮影前には身だしなみを整えること、洋服の借り着はよくないこと、光沢のある服地は白っぽく写るので注意が必要、化粧は薄めに、笑わない、酒酔はよくない、メガネはレンズのないもので、などなど、具体的な指示が事細かに記されている。写真を撮ること（撮られること）がいかに特別なことであったかがわかる。

（国立国会図書館デジタルライブラリーより）

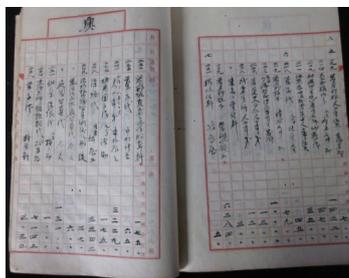


<参考資料>蘭説弁惑 磐水夜話

大槻玄沢述 山形屋東助、1799（寛政11）

仙台藩医の蘭学者、大槻玄沢（磐水、1757-1827）が門人に答える形でまとめた蘭学に関する概説書。この中でカメラ・オブスクラの仕組みを「写真鏡」、「どんくる・かあむる」（蘭語：donker kamer=暗箱）として説明しており、「写真」という訳語はここから始まったとも言われている。

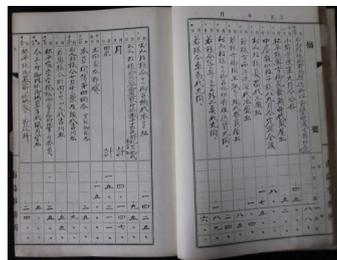
（早稲田大学図書館所蔵「古典籍総合データベース」より）



<参考資料>金銭出納類別簿

市島家 1900年（明治33）7月

市島家の金銭出納をまとめた帳簿の中に「清松様御用写真紙代 シハタ丹後」「荒浜御子供衆写真代」「庭園写真代」などの費用が記されている。丹後写真館は1872年（明治5）ころに諏訪神社境内付近に開業した新発田で最初の写真館と言われている。



<参考資料>本店依託出納類別簿

市嶋家東京事務所 1916年（大正5）

市嶋家東京事務所がまとめた出納帳。「若様分写真フィルム外二点」（10月2日）「若様分フィルム外三点」（10月26日）とあり、初之丞（徳厚）が写真撮影に力を入れていたことがわかる。また11月28日には「若奥様」、すなわち隆子の写真撮影代金を有名写真師である丸木利陽に支払っている。

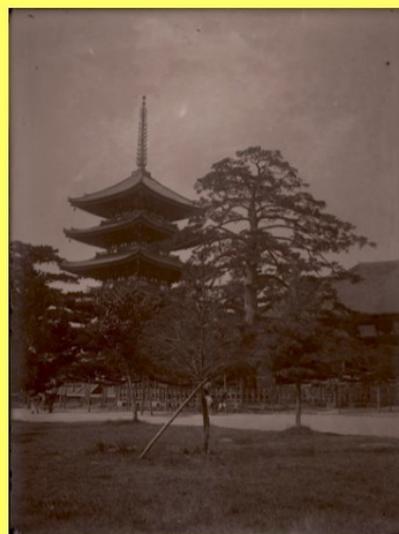
■解説文作成 藤原秀之（早稲田大学図書館）

■展示設営 今野真理子（市島邸）、山田諭志（新発田市）、藤原秀之（早稲田大学図書館）

平成30年度 第2回市島邸企画展

古写真がつたえる明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～



■会期:平成30年10月13日(土)～12月24日(月) 10月13日(土)入館無料

■ギャラリートーク:平成30年10月13日(土) 午前10時～ / 午後2時～

■講師:藤原 秀之 氏(早稲田大学戸山図書館担当課長)

■会場:市島邸(新発田市天王1563) ☎0254-32-2555

■時間:午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

※12月から閉館時間が午後4時30分となります(入館は午後4時まで)

■休館:毎週水曜日(祝日の場合は翌日休館)

■入館料:大人600円、団体(20名以上)540円 / 小中学生300円、団体250円

企画展開催に合わせて下記の
関連イベントを開催いたします。
詳しくは裏面をご覧ください。

・10月13日(土)

ギャラリートーク

・11月10日(土)

講演会・ナイトツアー

主催 / 新発田市 協力 / 早稲田大学図書館
お問い合わせ / 新発田市観光振興課 ☎ 0254-28-9960

古写真がつたえる明治の市島家

～市島邸所蔵のガラス乾板、アルバムなどから～

企画展開催に合わせて下記の関連イベントを開催いたします。是非ご参加下さい。

19世紀前半のヨーロッパで生まれた写真が幕末の日本に伝わり、新発田の地に最初の写真館が開業したのは1872年（明治5）頃と言われています。その後、撮影機材の進歩にともなって、写真は明治時代を通じてちょっと贅沢な趣味として多くの人々に親しまれるようになりましたが、そんな新しい“遊び道具”を市島家の人びとが放っておくはずがありませんでした。8代当主・徳次郎（湖月）は写真を嫌がる父静月の姿を残すべく、自ら技術を習得したそうです。また9代当主・徳厚の時代には市島家の人びとの日常が写真に記録され、今日の我々にその姿を伝えてくれています。

市島邸にはそうやって市島家で撮影された写真やそのガラス乾板、さらには写真に関する図書、絵葉書など、写真に関する資料が多数所蔵されています。今回はそんな市島邸に残る「写真」をテーマに、当時の人々の暮らしに触れていただければと思います。

市島邸に所蔵されているガラス乾板、写真から市島家の当時の暮らし、そして歴史をご紹介します。

■ギャラリートーク

日時 10月13日(土) 午前の部10:00~/午後の部14:00～

会場 市島邸

講師 藤原 秀之 氏 早稲田大学戸山図書館担当課長

入場料 無料

■講演会・ナイトツアー

市島邸企画展に関わる講演会と普段見ることができない夜の市島邸を巡るナイトツアーを行います。

日時 11月10日(土) 16:00～

会場 市島邸

講師 藤原 秀之 氏 早稲田大学戸山図書館担当課長

入場料 大人600円(団体料金540円) / 小中学生300円(団体料金250円)

定員 60人(先着)

申込先 新発田市観光振興課 ☎0254-28-9960へ電話にてお申込み下さい。

交通のご案内

車で：新発田駅・豊栄駅から 約15分

月岡駅・月岡温泉から 約 5分

日本海東北自動車道

聖籠・新発田ICから 約20分

駐車場：大型バス5台 普通自動車25台

